会　議　記　録

会議名称	第４回社会教育委員の会議
日　　時	令和５年１月 12 日（木）午後１時 02 分～午後３時 11 分
場　　所	中棟４階　第２委員会室
出 席 者	【委員】塩練、小澤、荻上、南、檜枝、赤池、天野、内山、笹井 【区側】生涯学習担当部長、生涯学習推進課長、社会教育センター所長、社会教育推進担当係長（社会教育主事）、教育連携担当係長（社会教育センター社会教育主事）、管理係長、管理係主査
配付資料	＜配付資料＞ 1　令和４年度第２回社会教育委員の会議　会議記録（案） 2　令和４年度小学生名寄自然体験交流事業学習成果発表会 3　すぎなみサイエンスフェスタ 4　すぎなみ教育シンポジウム 2022 について 5　横浜市の生涯学習施策の推進 6　令和３年度済美教室 あゆみ 7　発掘された縄文時代－光明院南遺跡－割れた石棒のなぞにせまる 8　令和４年度企画展　生誕 130 年 詩人・尾崎喜八と杉並 9　令和４年度杉並区立男女平等推進センター啓発講座 「知る・学ぶ・体験する「ジェンダー平等なケア」 10　超福祉の学校 11　とうきょうの地域教育　№147 12　なみすく　2022 冬号 13　社教情報 №88 14　杉並区立郷土博物館　年中行事だより　令和５年１月～3 月 ＜参考資料＞ 1　横浜市社会教育コーナー訪問時の説明資料等 2　ボランティアセンター（社会福祉協議会）ＨＰでの掲載内容（南委員作成）
会議次第	Ⅰ　報告事項 1　会議録について 2　小学生名寄自然体験交流事業について 3　すぎなみサイエンスフェスタについて 4　すぎなみ教育シンポジウム 2022 について Ⅱ　協議事項 1　横浜市社会教育コーナー訪問について 2　今期のまとめについて 3　次回に向けて

（意見要旨）
○生涯学習担当部長　前職で基本構想の策定に携わり、生涯学習の分野の一つに「共に認め合い、みんなでつくる学びのまち」を将来像として掲げ、社会教育士の育成活用を、実行計画の中で重点事業として位置づけた。セシオン杉並が大規模改修を経て、リニューアルするが、新たな社教センターを活動の拠点として、社会教育士の育成、まちおこし、しっかり考え方を組み立ててまいりたい。 ○社会教育センター所長　区内で様々な科学に関する活動する皆様の実行委員会が主催で開催するすぎなみサイエンスフェスタを１月15日に高円寺学園で開催した。対面形式により実施することができた。 ○教育連携担当係長　すぎなみ教育シンポジウム2022を「学びのプラットフォーム」を手がかりにしながら、前半は学びのプラットフォーム、わくわくする学びの場について、後半は参加者が小グループになって意見交換をするような形でした。登壇していただいた○○委員にもご意見をいただけたらと思います。 ○委　員　このシンポジウムに登壇者の1人として出席した。その場自体もわくわくしながら学びについて考える機会になったが、特に印象に残ったこととして、大人の自由研究みたいな発想が大事だということであった。また、子どもにすれば学校以外の時間のほうが長く、そこをどう生かすかも大事な視点だと思った。社会教育の議論につながるのではと思うこととして、学びと遊びはシームレスで、学校の持つ二面性と片面性をシームレスに考えていくことが、学びの場の可能性を広げるということにつながるのではないか。社会教育士という資格、存在が、シームレスで縦軸ではない横軸の発想であり、その必要性を社会あるいは地域の中で、どう具体の存在にしていくかだが、一般化できていない。わくわくする学びをつくるためにも横軸的な役割、機能をどう地域の中で培っていくか。それを育んでいくかが大事なポイントではないか。 ○委　員　どうしても学齢期以降に趣が置かれるが、未就学児の時点での学びが、すごくその後の人生に大きく影響していると思っている。 ○委　員　選択授業、ゆとり教育が入った時代に小学校、中学校で教育を受けていた方たちが、今小学校、中学生の子どもたちの親であるがそれまでの詰め込み教育が否定されて、転換をしていった形が本当によかったのか、学びのプラットフォームを考えるときに、先々を考えたものにしないといけない。コロナがあり、ギガタブレットが急遽入って、次の姿が描き切れていない中でスタートしたので、検証をちゃんとすべき。今回のこのプラットフォームは、20年後、30年後、2050年の教育をどうするというきっかけづくりと思った。 ○委　員　学校の後の時間帯、学校のカリキュラムに収まらない自由な発想の学習は、大事だが、学校がそれを全部担うのは難しい。何でも学びにつながるが、何でもいいと言ってもちょっとできない。 ○委　員　今まで固定化されていたものの枠組み全体を変えることから始めるということができていることがすばらしい。消極的な方たちでも学べる場づくりについてどう思うか。できる、やれる人たちだけで集まると、その中での合意形成はすごく凝集されるが、外側から見ている人たちにはその中に入るはきついという人たちもいる。

○委　員　行政内に社会教育主事がこれだけ豊富にいる杉並区はすごく重要。図書館協議会も、23区で持っているのは杉並区だけ。不可視化される財産の蓄積が区民を支え、行政区を支えている。遊びと学びが融合すればいいが、日々の可視化される蓄積が、行政内に支える人がいるというのは重要。民間で受託して仕事をするとなると、公正な立場をどこまで担保できるのか。

○委　員　区が教育委員会を通じて社会教育をする組織を維持していて、区の社会教育を支えているというのは、すばらしいことで大切だと思う。

○議　長　首長部局でやっている福祉を典型とする市民サービスは、サービスの享受者、客体になってしまう。社会教育というのは基本的に、教え合い、学び合いなので、お互いに育つ、育ち合いというような関係がある。だから教育という言葉を使っている。サービスの提供とではなく関わり合い。お互い育っていくというところが本質的な内容。

○生涯学習担当部長　　社会教育士について、文科省もすごくファジーな書き方で、社会教育、地域振興、まちおこしも担う人材としている。社会教育士の役割というのは、執行機関が違う社会教育とまちおこしという観点をミクスチャーさせながら、何か新しいものが生み出される可能性を議論した。二元的な執行機関の違いがあり、歴史的な経緯もあることからいろいろなご意見もあることを承知しています。

○社会教育推進担当係長（社会教育主事）　社会教育士の機能、行動、事例、具体的なものを積み上げた中から、社会教育士像みたいなものが出てくると思われます。社会教育士を置くことによって、どう社会が変わっていくかという発想と社会が変わっていく中で社会教育士という枠組みの中で、よい社会をつくるために必要とされるものと両面あると考えています。事例の発掘も行いながら、発想、アイデアを出すような組立てにせざるを得ないのではないか。様々な分野の中のスペシャリストと、どこにでも応用できるゼネラリストのような共通項というのがあり、社会教育士は前者に近いと思っています。

○副議長　杉並区としての社会教育士というものを独自につくっていけばいいのではないか。最近は「タイパ」とか言ってものすごく時間を効率化することを考えいかに時間を短縮していろんな情報を得るか、そういう若い人たちが多くなっている。従来のモラル、道徳的な感覚、常識が大きく変わろうとしている。世代だけではなく、テクノロジー、ネット社会とかで違ってきているずれをどうするか。

○委　員　「社会教育とは」「社会教育士とは」みたいなものは既に答えがあるわけではないので、自然体で杉並区はこう考えるというもの思った。社会教育は、学校教育のようにカリキュラムがはっきり定められているわけでもない。そこに正解を求めてしまうのは、ある意味人間を価値づけする非常に危険な側面もあると思う。区が直接的にやっている行政施策、教育施策のよさは生かした方がいいので、社会教育士が活動するときに、行政が背中を押す、補助するところをやっていくだけでも、結果的に市民原理のような形で、杉並区の中での社会教育関連の活動もより活発になっていくのではないか。

○委　員　勉強会に参加する90歳の人が考える学びと20歳の人が考える学びは全然違う、90代の人たちに自分から何かを提言する機会としての学習と

いうことは理解できないと言われて困っている。現実ははるかにずれていて、それぐらい広い対象をコアとして見なきゃいけない。あと自分の出来ることをボランティアで行いたいと思っても団体に入って、その団体としての活動だったらできるが個人としてはできないことが前提だと言われる。
ある区では団体というものを通さなくても、個人としてボランティアに仕掛ける提供のプラットフォームをつくっている。
2025年にはシンギュラリティーが起こると言われていて、人間の知能を人工知能が超えるので、人間が提供するものよりサービスのプラットフォームとしてＩＴのほうが超えるという時代に来たときに、人間の価値観や創造性をどうするか、本気で考えないといけない。子供たち同士の関わりが学校の中でのすごくメインなステージになる、子供たちだけでなく、大人同士、大人と子供同士、老人と子供も、関わりをつくるプラットフォームをどういうふうに用意するかということが非常に重要なことになるのではないか。

○委　員　図書館協議会でも、プラットフォームをどうするか議論になっていて、障害や困難を抱えた方たちは活用しなくてはならない一方で、実際に対話の場みたいなものがなくなっていくのは非常に危険な話。ＰＴＡの議論も、何をする場か本質が分からなくなってみんなの意見を聞かないで決めてしまう流れになるのはもう身近にある。一方で、生活不安もある中で、タイパやコスパに行きがちになるはあり得る。それを踏まえた上で、どうやって対話の場を社会教育の中で紡いでいくか。プラットフォーム、オンラインを踏まえた上での議論をしないと。

○委　員　ＡＩの時代が予想よりも早いことに驚くが、答えを出すのは人間はＡＩにはかなわないとなると、人間にしかできない力はコミュニケーション力。課題を設定することは人間にしかできないことでその課題をどうやって設定するのか、格差や違いがある人たちの話をどれだけ聞くことができるか、コミュニケーション能力にかかっている。これがＡＩにできない、人間にしかできない力だと思っている。それを社会教育士が特化して持つのであればかけ橋になるということをお願いできるのが一番と感じる。市民に近いところの活動と社会教育を結びつけるかけ橋、年齢層の違う人たちのかけ橋になっていただく。それからボランティアをしたい区民の力、市民の力が伸びるような仕掛けを、社会教育士の方にお願いできると、それぞれの力がうまく発揮できる区になっていくのではないか。栃木では社会教育士が各学校に1人ずつ配属されていて、学校教育と地域でいろんな能力とかを持っている方をつなげる役割を担っているらしい。コミュニケーション力、ファシリテーター、専門的な知識を持っている人たちをうまくつなげて社会教育士の方の能力を生かしていただけると、やりたい人がやっていけるという杉並区になるとうれしい。

○委　員　杉並区の学校では学校支援本部の事務局の方にお願いをすると、全部コーディネートしていただける。横浜の視察では社会教育士の方ってこうやってアウトソーシングしているというのを知ったのが大きなポイントだった。社会教育士はについて今まである種の既成概念があった。大学で単位を取って学習をした人たちが社会教育主事になっていく、でも、横浜ではＰＴＡ活動からの発展、区の学校支援本部の方々も、多分そういう

部分がたくさんあるだろう、うちの学校でやられている学校支援本部の方もある種社会教育士といってもいいだろうと思う。そういういろんなスタート段階が様々ある。それをコーディネートしていく方たちが社会教育士というふうに、認識していけばよいのではないか。だから、学校も、今までは教え育てるというのが教育だったと思うが、今後は教えるという部分が多分なくなってくるかもしれない。教育の「教」というのは「共」に、なって、共にその場所にいて、それぞれが育っていくためのコーディネートをしていくのが教育。そうなったときに、教員だけの力ではできないからいろんなサポートをしている人、様々な研究を紹介することが、社会教育士みたいになっていくのではないか。杉並では、学校支援本部が育っているので、今後いかに人材を育成していくか考えていくのも社会教育の在り方かと思う。

○委　員　ある区ではボランティアのマッチングサイトにＡＩをもう入れている。ボランティアサイトに登録しようとした人がこれに登録すると、ＡＩが自動的に選んで、その人に直接連絡してくる人が介在しないシステムをもうつくっている。

○生涯学習推進課長　杉並はやはり教育委員会の中に社会教育部門、生涯学習部門があるというのが意味があるのでどういうふうな仕組みがつくれるかということが重要だと思っている。やはり自分の能力を生かしてもらいたい、こういうことに関心があるから学びたいという人たち、人材、資源というものを、つなぎ合わせることができるような社会教育士の新たな仕組みを、杉並モデルとしてつくっていきたい。